

「基礎技能 (音楽1)」

— 読譜 —

安藤 恭子*・藤田 桂子**・森 久見子

“Basic skill (Music)” Reading Music

Kyoko ANDO, Keiko FUJITA and Kumiko MORI

1、緒言

本学短期大学部保育学科の平成22年度の1年生は114名である。そのうち、ピアノ学習未経験者は10名いることがアンケート調査¹⁾によって判明した。ピアノ学習未経験者をはじめとする多くの学生は入学後、あるいはそれ以前から、音楽、特に自身のピアノ演奏技術に対する不安を抱えている。そのような不安をできるだけ取り除き、学生が前向きな姿勢で授業に臨むことができるように配慮して指導を行っているが、学生たちは、音楽を学ぶ上での基礎的な知識や基本的な演奏技術から順次学習していかなければならないことを見落としているように思う。特に、読譜力は地道な努力なくしては獲得できるものではないため、読譜に対する意識が低いことは読譜力の習得を妨げる一因になると考えられる。

そこで本学科では、これまで「基礎技能 (音楽1)」において、「読譜力を養い、初見視奏や学習する曲を早く習得できる力を養うこと」を到達目標の1つとしてきた。読譜の定義としては広義・狭義さまざまであるが、山田潤次氏は「音楽家重要用語300の基礎知識」の中で、読譜指導のプロセスとして「①楽譜についての知識の獲得、②楽譜に内在する音楽の読み取りや理解、③読みとった音楽を演奏するための技能の獲得」²⁾の3つを挙げている。

今年度の読譜指導は、読譜力の中でも基礎的な能力となる「楽譜についての知識の獲得」を参考にして、学生全員が音符を早く正確に読み取る力を身につけることを目指した。

保育者を目指す学生にとって、専門的な高度の演奏技術や音楽的知識は必要ではないと思われるかもしれない。しかし、保育現場ではその場の環境や子どもの状態に合わせて、常に臨機応変に対応する必要がある。そのために楽譜を読み取る能力や、楽譜を見て即座に歌ったり楽器で演奏したりする表現上の実践力、応用力が求められることとなる。こうした能力を身につけることは、ある程度の音楽経験がある学生にとっても努力が必要なことであるが、ピアノ学習未経験者や音楽を苦手とする学生にとっては、保育者を目指す上での高いハードルであると同時に、乗り越えなければならない関門の1つであると言えるだろう。

本研究では、読譜力の育成を目指した取り組みとその結果を考察するとともに、来年度以降の「基礎技能 (音楽1)」や後期開講の「基礎技能 (音楽2)」における読譜指導の在り方を含

* 名古屋女子大学学生支援センター教学支援部門保育学科契約職員

** 名古屋女子大学短期大学部保育学科非常勤講師

む指導内容について検討するものとする。

2、アンケート調査

(1) 目的と経緯

本学科では、楽譜に対する学生の意識を高め読譜力を育成していくことを「基礎技能（音楽1）」の指導目標の1つとして掲げ、これまで一貫して取り組んでいる。平成17年度に本学科が開設されて今年度で6期目を迎えた。読譜に関する指導は、学科開設から3年間は音楽担当教員（「基礎技能（音楽1）」：ピアノ個人レッスン担当9名）がレッスンを通して独自に行っていた。しかし、近年の保育士・幼稚園教諭採用試験の音楽課題において、初見視奏を含む課題が多くなってきたことを受けて、平成20年度より音楽担当教員全員で期間・方法を統一して指導するようになった。平成20年度の指導方法及びその成果については、三輪雅美氏が「名古屋女子大学紀要第55号（人文・社会編）」に報告³⁾を行っている。

平成20年度の指導方法としては、まず、楽譜に階名を書き込んでもよいのは学生が授業に慣れる5月中までとし、それ以降は書き込まないというきまりに統一した。これは、ピアノ学習未経験者や読譜を苦手としている学生はしばしば楽譜に階名を書き込むが、この行為によって楽譜に書き表された音符ではなく、自身が書き込んだ文字を目で追ってしまうのではないかという懸念が教員の間で出されたためである。次に、音符カード及び五線ボードを用いた学習方法を導入した。これらは個人レッスン内で必要に応じて使用するようにし、音符カードは希望する学生には貸し出しも行い、自宅でも復習しながら練習するように促した。

これらの取り組みは現在でも引き続き行っている。昨年度は階名の書き込みをしてもよいのは5月の連休までと期間を短縮した。また音符カードの使用では、特に音符が読めない学生に対してカードを用いた課題を出した。このように、自宅でも有意義な練習を行うことができるようにするなど、学生の読譜力を養うためのより効果的な手だてを模索してきた。今年度はこうした取り組みに加えて、入学時にアンケートを実施することによって読譜に対する学生の意識と実力を把握した上で対応することにした。そして、読譜について苦手であると認識している学生に焦点を当てた指導を行うことによって、対象学生はもちろん、対象外の学生にも刺激となって相乗効果をもたらし、保育学科の学生全員が楽譜に書かれている音符を早く正確に読むという基礎的な能力を獲得できるように取り組んだ。

(2) アンケート調査

調査時期：第1回 平成22年4月6日 新入生オリエンテーションの中で実施

第2回 平成22年4月13日 授業オリエンテーションの中で実施

調査方法：質問紙法アンケート

調査対象：平成22年度本学短期大学部保育学科1年生114名 全員

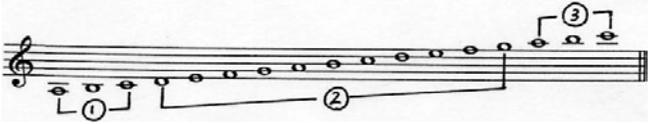
アンケート内容を表1として示す。ただし、アンケートの全内容のうち、読譜に係る部分のみ掲載する。また、掲載した譜表のブロック分けの基準は以下の通りである。

- ①と④ 五線より下の加線を使って表した音域
- ②と⑤ 五線内の音域
- ③と⑥ 五線より上の加線を使って表した音域

表1 平成22年度実施アンケート（読譜に関する部分のみ抜粋）

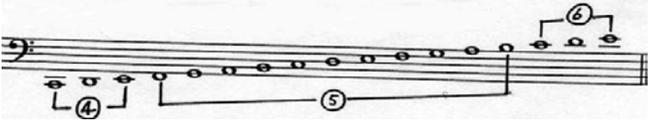
○ 印をつけてください。

* ト音記号（高音部譜表）



①の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない
 ②の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない
 ③の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

* ヘ音記号（低音部譜表）



④の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない
 ⑤の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない
 ⑥の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

（3）平成21年度との比較

「基礎技能（音楽1）」では毎年度、第1回目の授業オリエンテーションの際に音楽関連のアンケートを実施してきた。これは、学生の音楽経験や音楽環境を把握することによって、一人ひとりに合ったピアノ個人指導を行うことを目的としているものである。以下に平成21年度に実施したアンケートの内容を示す。

調査時期：平成21年4月14日 授業オリエンテーションの中で実施

調査方法：質問紙法アンケート

調査対象：平成21年度保育学科1年生117名 全員

表2 平成21年度実施アンケート

1 ピアノについて

1) 今までにピアノを習ったことはありますか。
 はいと回答した人→ ①習っていた期間
 ②これまでに習った教材（楽譜）

2) 家にある楽器を教えてください。

2 歌について

1) 歌うことが好きですか。また、その理由を簡単に書いてください。

2) どのような曲をよく歌いますか、○印を付け曲名も書いてください。
 () ポピュラーソング () 演歌 () アニメソング
 () 唱歌 () 童謡 () その他

3 楽譜について

・○印をつけてください。
 ト音記号（高音部記号）() 読める () 少し読める () 読めない
 ヘ音記号（低音部記号）() 読める () 少し読める () 読めない

今年度のアンケートでは、回答結果を指導内容に反映させることができるように実施方法及びアンケートの内容の見直しを行っている。まず、読譜について詳細な意識調査を行うために、アンケートを2部構成とした。第1回目のアンケートを入学直後の新入生オリエンテーションで実施し、入学までのピアノ学習経験を調査するとともに、読譜について詳細な問いかけをして学生の読譜に対する意識を明らかにした。第1回目でこれらの調査を行ったのは、回答結果をふまえてピアノ指導のグループ分けを行うためである。続いて、第2回目のアンケートを授業オリエンテーションの中でを行い、ピアノ以外の音楽活動や家庭にある楽器等の音楽環境、後期開講の「基礎技能(音楽2)」に関連して歌についても調査した。

学生の読譜意識に関する質問は、表2として掲載したように平成21年度実施のアンケート⁴⁾の中にも取り入れている。しかし、授業を受ける前の段階での調査ということを考慮して、あまり音楽経験のない学生でも抵抗なく回答できるようにト音記号、ヘ音記号のそれぞれの音符について1. 読める 2. あまり読めない 3. 読めないに分けての大まかな回答までにとどめてきた。今年度の調査ではト音記号、ヘ音記号のそれぞれを、五線内の音域と上下の五線外の音域、つまり加線を使って音高を表した音域の3つずつのブロックとして分割し、全部で6つの各ブロックを「見てすぐ読める」「考えれば読める」「読めない」として回答させることにした。また、ブロックに分割した譜表をアンケートに載せることによって、音符を視覚的に捉えて回答できるように工夫した。この調査は、それぞれのブロックの音符に対する学生の意識を明確に把握するためのものであり、更には三輪氏が行った取り組みの延長として、五線内の音符が読めるようになった学生には五線外の加線を使って表した音符も読めるように促していくことを前提としたものである。三輪氏は五線外の音域の読譜について、一般的に、五線内の音符が読めるようになった後に読めるようになるとし、研究の中で行ったアンケート調査によって裏付けている。

今年度実施した読譜に関する詳細な意識調査の結果から、各ブロックの音符に対する学生の読譜意識を明らかにし、読譜指導においてどのようなアプローチがより有効であるかを検討した。

(4) 結果

アンケート(表1)の回答のうち、ト音記号の3つのブロックについて表3-1としてまとめた。アンケートと同様に①は五線より下の加線を使って表した音域、②は五線内の音域、③は五線より上の加線を使って表した音域を指すものとする。

表3-1 アンケート結果(ト音記号)

	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない
①	70名 (61.4%)	43名 (37.7%)	1名 (0.9%)
②	89名 (78.1%)	24名 (21.0%)	1名 (0.9%)
③	49名 (43.0%)	63名 (55.2%)	2名 (1.8%)

まず、ト音記号の五線内の音域である②のブロックの音符は8割近い学生が「見てすぐ読める」と回答している。加線を使って表した音域については、約6割の学生が①のブロックを「見てすぐ読める」と回答しているのに対し、③のブロックを「見てすぐ読める」と回答した学生

は約4割にとどまった。①から③の3つのブロック全てを「見てすぐ読める」と回答した学生は46名であり、これは全体の40.3%にあたる。また、それぞれのブロックの音符を「読めない」と回答した学生は非常に少なく、3つのブロック全てを「読めない」と回答したのは1名⁵⁾だけであった。これらのことから、ト音記号の音符に対する学生の読譜意識としては、五線内の音域、五線より下の加線を使って表した音域、五線より上の加線を使って表した音域の順に、その読譜力は低下すると認識していることを読み取ることができる。

次に、ヘ音記号の3つのブロックについて表3-2としてまとめた。④は五線より下の加線を使って表した音域、⑤は五線内の音域、⑥は五線より上の加線を使って表した音域を指すものとする。

表3-2 アンケート結果（ヘ音記号）

	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない
④	33名 (29.0%)	73名 (64.0%)	8名 (7.0%)
⑤	55名 (48.2%)	53名 (46.5%)	6名 (5.3%)
⑥	43名 (37.7%)	63名 (55.3%)	8名 (7.0%)

ヘ音記号の回答結果もト音記号と同様に、「見てすぐ読める」と回答した学生が最も多かったのは五線内の音域である⑤の部分であった。五線外の加線を使って表した音域は、④のブロックを「見てすぐ読める」と回答した学生は全体の3割にも満たないが、⑥の部分では4割弱と④のブロックに比べてやや多い結果となった。ヘ音記号の④から⑥の3つのブロック全てにおいて「見てすぐ読める」と回答した学生は28名であり、全体の24.6%にあたる。また、3つのブロック全てを「読めない」と回答した学生は6名であった。ヘ音記号の音符については、五線内の音域、五線より上の加線を使って表した音域、五線より下の加線を使って表した音域の順に、その読譜力を低いと認識していると読み取ることができる。

昨年度まで実施していたアンケートからも得られていた結果ではあるが、ト音記号に比べてヘ音記号の音符を「見てすぐ読める」と意識している学生は少ない。ト音記号の約5～6割の回答数にとどまる結果となっており、ト音記号に比べてヘ音記号の読譜力は下がる傾向にあると言えるだろう。ト音記号の読譜力の方が高い原因には、音楽を学ぶ際にト音記号の音符には早い段階で触れることや、歌の旋律等で目にする機会がヘ音記号の音符に比べて多いことなどが挙げられるかもしれない。また、五線外の音符に関しては、ト音記号では五線より下の加線を使って表した音域の方がその読譜力を高く認識している学生が多かったのに対して、ヘ音記号では五線より上の加線を使って表した音域の方を得意としている学生が多いことがわかった。これは、アンケートの実施方法や内容を見直したことによって得られた結果と言えるが、ト音記号、ヘ音記号それぞれの五線外の音域に対する読譜意識については、来年度以降も調査を続けて総合的に判断する必要があるだろう。

三輪氏は、読譜に対する意識を持続していれば、時間をかけた取り組みを反復することによって、五線内の音符と同じように五線外の音符についても読譜力の向上を期待できると述べた。そして、五線内の音符を読めるようになった後、五線外の加線を使って表した音符の読譜訓練へのステップアップを図るように促している。

多くの学生にとって、五線外の加線を使って表した音符を読めるようになることは、読譜力

を身につける上での1つのハードルとなるようである。しかし、それらの音符はまとめて捉えられてしまうことが多く、五線より上の音域であるか下の音域であるかについてはあまり問題にされてこなかったように思う。今回の調査によって、加線を使った音符の中でも五線より上の音域、あるいは下の音域かによって、学生の読譜意識には違いがあるという結果を得ることができた。

3、指導

今年度は授業及びピアノ個人レッスン内での読譜指導に加えて、読譜について苦手であると認識している学生に焦点を当てた指導を行うことによって、学生全体の読譜力の向上を目指した。

(1) 学生全員を対象とした読譜指導

前章でも述べたが、音楽教員全員で統一して取り組む読譜指導は以下の2つである。

- ①読譜力の育成の妨げとなることが懸念されるため、楽譜への階名の書き込みは5月の連休以降は行わないということを徹底する。
- ②特に音符が読めない学生に対して音符カードを用いた課題を出し、自宅でも復習しながら練習するように促す。

これらの取り組みの成果を以下の要領で調査し、検証した。

時期 第1回：平成22年4月13日(火)、第2回：平成22年8月3日(火)

目的 第1回：「基礎技能(音楽1)」の授業を受ける前の読譜力を調査し、学生が実際にどの程度音符が読めるのかを把握する。

第2回：全15回の「基礎技能(音楽1)」の授業を受けた後に再び読譜力を調査し、第1回目の結果と比較することによって、読譜に関する指導の成果を考察する。

対象 平成22年度保育学科1年生114名 全員

方法 ト音記号20問、ヘ音記号20問の読譜問題をそれぞれ1分間の制限時間内に解答させる。

第1回目、第2回目の問題の内容は全く同じものとする。

2回実施した読譜力調査の結果を正解数毎の人数としてまとめた。第1回目の調査結果を表4-1、第2回目を表4-2として示す。

表4-1 第1回目の読譜力調査の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ト音記号	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	4	2	2	1	2	5	4	4	87
ヘ音記号	3	0	2	0	1	3	2	5	3	2	2	2	1	6	2	0	6	5	8	61

(数字は正解数毎の人数)

第1回目の読譜調査で全20問を正解できた学生は、ト音記号は87名(76.3%)、ヘ音記号は61名(53.5%)であった。そのうちの57名(50.0%)がト音記号、ヘ音記号共に全問正解して

いる。しかし、へ音記号の問題では、全問正解した学生を除くと、その正解数は1問から19問までの広範囲に亘った。アンケートによる意識調査の結果から、ト音記号に比べてへ音記号の読譜力は低いと学生が認識していることが明らかとなっていたが、読譜意識と同様に、実際の読譜力もト音記号に比べてへ音記号の方が低いことがわかる。

表4-2 第2回目の読譜力調査の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ト音記号	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	12	98
へ音記号	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	0	0	4	4	18	82

(数字は正解数毎の人数)

約4か月後に実施した第2回目の調査では、ト音記号の問題を全問正解した学生は98名(86.0%)、へ音記号の問題は82名(71.9%)であり、ト音記号、へ音記号共に全問正解した学生は73名(64.0%)と、いずれも第1回目の調査時より増加する結果となった。ト音記号の問題は、一番正解数の少ない学生でも14問を正しく読むことができしており、その他の学生は皆18問以上を正解することができた。それに対してへ音記号の問題では、ほとんどの学生が第1回目より正解数を増やしてはいるものの、3名の学生の正解数が一桁と、問題の半数に及ばなかった。

ト音記号の問題は、第1回目の調査を実施した時点でほとんどの学生が問題の半数以上を正しく読むことができていた。しかし、最も著しい結果を出した学生⁶⁾の結果を見てみると、第1回目の調査では正解数が2問だったが、第2回目の調査時には全問正解することができた。また、第2回目の調査で20問全てを正しく読譜できた学生は、第1回目より11名増加した98名であったが、第1回目の調査時に読み間違えてしまった問題を第2回目では確実に正しく読めたという学生が多い。このようにト音記号の問題では、制限時間の設定された状況でも、高い確率で正確に読譜できる力を学生全員が身につけることができたと考えられる。

へ音記号は、第1回目の読譜調査での全問正解者が少なかったこともあり、第2回目には49名の学生が正解数を伸ばした。特に17名の学生は第1回目の結果と比べて10問以上も正解数を伸ばしている。またそのうちの2名⁷⁾は、第1回目の調査結果は正解数が1問とほとんど読譜ができない状態であったにもかかわらず、第2回目の調査では全問を正しく解答することができた。第2回目の調査においても正解数が問題の半数に満たなかった学生が3名いたことは先に述べたが、この3名のうち2名は第1回目の調査時から正解数が変化していない。この2名の学生は、入学時に実施したアンケートで読譜について「読めない」と回答したブロックがなかったため、後述する少人数に焦点を当てた読譜指導の対象とならなかった。読譜力がきちんと身につけていないことを自覚していないために、取り組みの成果が表れなかったと考えられるのではないだろうか。このように、実際には十分な読譜力のない学生が指導対象から漏れてしまったことは、今後の課題として検討する必要がある。

(2) 読譜に苦手意識を持つ学生を対象とした読譜指導

時期 平成22年4月27日(火)～平成22年7月27日(火)

「基礎技能（音楽1）」の全15回の授業のうち、第1回目の授業オリエンテーションと第15回目の試験を除く13回の授業時間内。

目的 音符を「読めない」と意識している学生に、早く正確に音符を読む力を身につけさせる。
 対象 平成22年保育学科1年生114名中、アンケートで調査した6つのブロックの読譜について、どこか1つでも「読めない」と回答したブロックがあった学生10名。
 方法 「基礎技能（音楽1）」の授業における個人ピアノレッスンの待ち時間を活用して、毎回10問ずつの読譜問題（第13回目以外は全音符表記とする）を解答する。取り組んだ読譜問題の内容は以下のとおりである。加線を使って表した音域はどのブロックも上下ともに第3線の線の音符までとした。

- 1、ト音記号の五線内の音域から出題
- 2、ト音記号の五線より下の加線を使った音域から出題
- 3、ト音記号の五線より上の加線を使った音域から出題
- 4、ヘ音記号の五線内の音域から出題
- 5、ヘ音記号の五線より上の加線を使った音域から出題
- 6、ヘ音記号の五線より下の加線を使った音域から出題
- 7、ト音記号の3つのブロックからランダムに出題
- 8、ト音記号の3つのブロックからランダムに出題
- 9、ヘ音記号の3つのブロックからランダムに出題
- 10、ヘ音記号の3つのブロックからランダムに出題
- 11、ト音記号、ヘ音記号の6つのブロックからランダムに出題
- 12、ト音記号、ヘ音記号の6つのブロックからランダムに出題
- 13、ト音記号、ヘ音記号からそれぞれ10問ずつ出題（旋律）

13回の問題の内容は、6つのブロックを満遍なく学習できるように配慮している。学生自身が読譜力の向上を感じて、楽譜に対する高い意識を持ち続けながらステップアップしていける構成を目指した。まずト音記号から着手し、あまり苦手意識を持っていないと考えられる五線

表5 対象者10名の読譜問題の正解数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	
A	10	10	10	10	10	5	9	10	10	10	10	9	10	10
B	10	10	8	10	10	7	10	10	7	9	10	10	10	9
C	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
D	10	10	9	5	10	10	10	10	10	8	9	10	9	10
E	10	10	10	10	4	10	9	10	8	8	10	10	10	10
F	10	10	10	10	10	10	9	10	10	7	9	10	10	10
G	9	10	0	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
H	0	10	1	9	10	10	4	7	7	4	5	6	8	6
I	10	10	10	10	10	0	7	10	5	8	7	5	7	5
J	10	10	10	6	10	10	10	10	10	8	8	8	10	9

(数字は毎回10問ずつ実施した読譜問題の正解数)

内のブロックから順に指導を行うことによって、五線外に加線を使って表した音域にもスムーズに取り組むことができるように工夫している。そして、最終的にはト音記号とヘ音記号の全ての音域がランダムに混合した問題や、実際の楽譜のように旋律的に書き表されている問題でも読譜できる力を身につけさせたい。少人数を対象とした短期間での取り組みではあるが、マンツーマンで指導できることの利点を活かして、解答後はすぐに採点し、間違えてしまった問題をその場で再度読み直して自分の力で正しい答えを導き出すようにする。また、学生が問題を解く方法や解いていく順序から気付いたことや改善できる点についてアドバイスを与え、読譜力の習得を手助けする。

上記の方法で実施した13回の取り組みの結果として、正解数の推移を表5としてまとめた。対象者10名はA～Jとして表すこととする。

この取り組みを開始する前に、6つのブロックから10問ずつ出題した読譜問題を対象者10名に解答させた。時間制限を設けずに行い、解答する様子から、どのような方法で読譜を行い、実際にどの程度音符が読めるのかを観察した。その結果、対象者AからGまでの7名は解答に時間がかかり、読み間違え等のミスは見られるものの、基本的には読譜できることがわかった。特にFとGの2名はかなりの時間を要するが、全てのブロックの音符を正確に読むことができた。しかし、HからJの3名は全く読譜できないブロックがあり、特にHはト音記号、ヘ音記号共に、どのように問題に取り組んだらよいかかわからないと投げ出してしまった。また、IとJはヘ音記号の音符はほとんど読むことができない状態であった。このことから対象者10名の中でも、その読譜力には大きな差があることが明らかとなった。

そうした状況をふまえて指導を開始した。まずは各自が覚えやすく目印となる音をト音記号、ヘ音記号それぞれ1つずつ決め、その音を基準にして順に数えていけばどんな音でも読めるようになることを説明した。取り組みを開始して早々の第2回目の指導の際、初回と異なるブロックの読譜問題を行ったにもかかわらず、全員の読譜力に向上が見られた。そのため、急遽聞き取り調査を行ったところ、対象者のうち何名かは前回から自主的に勉強してきた。また、読譜のコツがわかったと回答した学生もいた。その後も覚えやすい音から見てすぐ読めるようにしていくこと、そのような音を増やしていくことによって問題のより近くの音を基準とすることができ、時間をかけなくても早く正確に読譜できるようになることを対象学生の進度に合わせて順次指導を行った。

表6 対象者10名のアンケート回答結果の変化

	指導前のアンケート回答結果			指導後のアンケート回答結果		
	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない
①	3名	6名	1名	3名	7名	0名
②	3名	6名	1名	7名	3名	0名
③	2名	6名	2名	3名	7名	0名
④	0名	2名	8名	2名	8名	0名
⑤	0名	4名	6名	2名	8名	0名
⑥	1名	1名	8名	3名	7名	0名

前述したように、対象者AからGの7名はこの取り組みを開始する前からある程度の読譜が可能であったが、取り組みを続けたことで、第11回目以降に実施したようなト音記号とヘ音記号の音符を混合した難易度の高い問題でも正確に読譜できるようになった。また当初、音符に対する知識が全くなかったHは、取り組みの前半は1分間の制限時間内に10問全てを解答することができなかったが、後半では、必ずしもパーフェクトではないものの全ての解答を記入できるようになった。

全13回の取り組み終了後、対象である10名の学生に表1として掲載したアンケートを再度回答させ、読譜意識の変化を調査した。その結果を入学時の回答と併せて表6にまとめた。

この読譜指導は、対象を少人数に絞ってマンツーマンで行った取り組みであったため、対象者それぞれの読譜力やその進度に合わせた指導を行うことができた。そのため、対象者全員が同じレベルまで到達できたわけではないが、個人個人の読譜力の向上には成果があったように思う。アンケート回答結果の変化として、「見やすく読める」はあまり増加しなかったが、全てのブロックにおいて「読めない」の回答をなくすことができた。全く読譜ができなかった対象者Hは、全13回の取り組み終了後、「ト音記号とヘ音記号の混合した問題では、頭の切り替えに時間がかかって難しい。」と話してくれた。これは、この学生が自らの読譜力についての問題点を見出し、それを克服していこうと意識していることの表れではないだろうか。また取り組みを始めた頃は、「五線外の音符は難しい。」と話していた学生たちであったが、取り組みの終盤では「加線の多い音符ほど難しい。」という表現へと変わっていった。週に一度の取り組みではあったが、その中で自分にとって読みにくいのはどのような音符なのかを分析し、意識することによって着実に読譜力を獲得していったのだと考えられる。

また、この読譜指導に関するアンケートも実施した。アンケートの内容と回答結果は表7のとおりである。

表7

①	この取り組みは読譜力を身につけるために役に立ちましたか。			
	役に立った	(9名)	少し役に立った	(1名)
	あまり役に立たなかった	(0名)	全く役に立たなかった	(0名)
②	読譜について、この取り組みの他に自分で何か努力しましたか。			
	はい	(4名)		
	いいえ	(6名)		
③	今後も読譜力を身につけるために、自分で努力を続けていく意欲を持っていますか。			
	はい	(10名)		
	いいえ	(0名)		
④	この取り組みのほかに、読譜に関して行ってほしかったことがあれば書いてください。			
	記入	(3名)		
	無記入	(7名)		

②及び④の設問については記述回答としたため、以下に記しておく。

- ② ・いろいろな楽譜を見た。
- ・楽譜を使って読む練習をした。

「基礎技能（音楽1）」

- ・自分でピアノを弾くときに、楽譜に階名を書き込まず取り組もうとした。
 - ・楽譜をきちんと学んで、ピアノを弾いた。
- ④
- ・後期もやってください。
 - ・後期もやりたい。
 - ・十分力がついたと思う。

マンツーマンでの指導は個人の能力や進度に合わせた指導が可能となるため、学生の満足度も高く、対象者たちが今後も取り組みを継続しようとする意欲的な姿勢を見せたことは大きな成果であると言える。しかし、読譜に対して苦手であると認識し、また個人的な指導を受けているにもかかわらず、取り組みの最中に自身でも手だてを考えて努力を行った対象者が少なかったのは残念な結果であった。今後は、読譜に対して更に積極的に取り組む意欲を引き出すような指導法を検討する必要がある。

今年度は、学生全員を対象とした読譜指導に加え、読譜に対して苦手意識を抱いている学生に焦点を当てたマンツーマンでの指導を試みた。読譜力は地道な取り組みを反復して行うことによって身につくものであるから、全15回の「基礎技能（音楽1）」の授業内で楽譜に触れたり、与えられた課題をこなしていくことによって、ある程度の力は育成されるようである。しかし、入学時に行ったアンケートで「読めない」と回答しているものの、時間をかければ正しく読譜できる学生もいれば、逆に、「読めない」と回答していないが実際にはほとんど読譜できない状態の学生もいることがわかった。後者は明らかに前者より読譜力が低いにもかかわらず、自身の読譜力を的確に認識していないために、マンツーマンでの読譜指導の対象から外れてしまう結果となってしまった。今後もこの指導方法を行う場合は、アンケートの回答結果だけでなく、読譜力調査の結果によって得られる、学生の実際の読譜力を照らし合わせて対象学生を選定することが望ましいと考える。この改善方法によって、読譜に苦手意識を持つ学生と、実際に読譜のできない学生の双方を対象とした指導が可能となり、学生全員の読譜力の向上もより期待できるのではないだろうか。

4、結語

今年度の「基礎技能（音楽1）」では、読譜力の中でも基礎的な能力である、音符を早く正確に読み取る力を学生全員が身につけることを目指した取り組みを実施した。指導内容に反映させることができるように、読譜に関する意識調査を含むアンケートの実施方法及び内容の見直しを行った結果、多くの学生が五線内の音符に比べて加線を使って表した五線外の音域の読譜を苦手としていることだけでなく、五線外の音域の中でも五線より上の音域、あるいは下の音域かで学生の読譜意識は変わることがわかった。そしてこの意識調査の結果を基に、読譜に対して苦手意識を持つ学生を対象としたマンツーマンでの読譜指導を行った。週に一度の取り組みであったが、それぞれの能力や進度に合わせた綿密な指導を行うことができたため、対象学生の読譜に対する苦手意識を軽減し、ある程度の読譜力を習得させることができた。また、対象となった学生が読譜に取り組む上での問題点を分析して克服し、取り組みを継続しようとする意欲的な姿勢を見せたことも大きな成果であったと言えよう。しかし、実際には十分に読譜できる力が身につけていないにもかかわらず、読譜に関する意識調査で「読めない」と回答

しなかったために、マンツーマンでの指導の対象から漏れてしまった学生が数名いた。こうした学生には授業で取り組んでいる読譜指導が成果としてあまり表れなかったが、これは音符を「読めない」と意識しておらず、読譜に対する意識が低いためだと考えられる。学生全体では、授業を受ける前と後とで実施した読譜力調査の結果、授業及びピアノ個人レッスン内での読譜指導が読譜力の向上にある程度の成果をもたらしているという結果を得ることができた。

読譜指導は今後も継続して取り組む予定であるが、学生が更なる読譜力の獲得を目指してより積極的に取り組むことができるように手助けしていかなければならない。特に学生全体の読譜力は、意識及び実際の読譜力の双方において、ト音記号に比べてヘ音記号の音符の方が低い傾向にある。学生たちが特に苦手としているヘ音記号の五線外の加線を使って表した音符は、歌唱の伴奏として保育現場で必要になることが考えられるため、こうした音域の読譜力の強化も目指していく。今年度初めて実施したマンツーマンでの指導では、対象学生以外の学生への相乗効果も期待したが、読譜に関する意識調査で「読めない」と回答しなかったためにマンツーマンでの指導対象から漏れてしまった学生には読譜指導の結果があまり表れなかったことからわかるように、対象学生以外への効果はあまり見られなかった。対象となった学生だけでなく、学生全体の読譜力向上に繋がるように指導を見直し、また、マンツーマンでの指導が可能でない場合にも、学生全体に読譜に対する意識を強く持たせるような指導法を模索していく必要がある。

本学科では、読譜に関する意識調査から実際の読譜指導まで、音楽理論の授業やピアノ個人レッスンと一体となっていて行っている。マンツーマンでの指導を行う上でも、対象学生のピアノ指導担当教員と指導内容や進捗状況等の情報を共有して進めてきた。対象学生が後期開講の「基礎技能 (音楽2)」においても、楽譜に対する高い意識を持って取り組むことができるように配慮したい。また「基礎技能 (音楽1)」の終了時、読譜だけでなく音価⁸⁾についても知識のない学生、意識の低い学生がいることが問題点として提示された。こうした意見を考慮して後期以降の指導を検討したい。

今回の調査及び指導から、読譜力の育成には、自身の読譜力を正しく認識して読譜力を身につけようとする高い意識を持ち、その上で継続した取り組みを行うことが効果的であると明らかにすることができた。保育現場では、対象となる子どもや置かれた環境に合わせて臨機応変に対応できる音楽的な力が求められることとなり、保育者を目指す学生たちはその基礎から順に学び、保育者として求められる音楽的な資質を身につけていく必要がある。本研究で得た結果を拠り所として読譜指導を見直し、今後の指導内容を検討するものとした。

注

- 1) アンケート調査の詳細については後述している。
- 2) 末富功修編著「音楽家重要用語300の基礎知識」『重要用語300の基礎知識 8巻』明治図書、2001、p.176
読譜についての項目は山田潤次氏の執筆である。
- 3) 以降、三輪氏の見解については、三輪雅美著「基礎技能・音楽 (第1報) - 読譜 -」『名古屋女子大学紀要』第55号 (人文・社会編)、2009、p.147-157を参照。
- 4) 同上、p.150を参照。
- 5) この学生はピアノ学習未経験者10名のうちの1名である。
- 6) この学生は後述する対象者Hである。
- 7) 2名のうち、1名は後述する対象者Dである。
- 8) 音符や休符によって明示された長さ。

参考文献

- ・末富功修編著「音楽家重要用語300の基礎知識」『重要用語300の基礎知識 8巻』明治図書、2001、p.176
- ・菅原克己著「音楽指導の実践」『子どもと音楽 第5巻』同朋舎出版、1987、p.30-31
- ・東川清一著「音楽指導の手引き」『子どもと音楽 第4巻』同朋舎出版、1988、p.40-42
- ・三輪雅美著「基礎技能・音楽（第1報）―読譜―」『名古屋女子大学紀要』第55号（人文・社会編）、2009、p.147-157

